

<書評>

病態の解釈と臨床的対応のあり方を知る

別冊『呼吸器ジャーナル』
COVID-19 の病態・診断・治療
現場の知恵とこれからの羅針盤

小倉 高志●編

評者 二木 芳人(昭和大客員教授・臨床感染症学)

新型コロナウイルス感染症がパンデミックを生じて早1年になろうとしている今日、世界の診断確定感染者数は1億人を超え、死者も220万人を上回り、まだまだ感染収束には程遠い感がある。本書が上梓された2021年1月中旬、わが国でも第3波の真っ只中であり、これからもこの感染症とは長い戦いを余儀なくされるであろうと考えられる。

われわれは、この感染症とはすでに1年以上の戦いを繰り広げてきたが、当初全く未知のウイルス感染症であった本症も、多くの基礎的研究・臨床的経験が積み重ねられた結果、かなりの情報がすでに得られ、病態の理解も進んだと考えられる。その結果として、かなり効率的な予防や診断・治療が実施可能となっており、ワクチン接種も昨年末から急速に世界に普及し、わが国での実施もまさに目前である。

ただ反面、この新しいウイルス感染症では現在も未知の部分、あるいは将来への課題も少なからず残されており、今後の基礎的あるいは臨床的研究のさらなる継続は極めて重要であろう。

本書は、基礎・臨床のさまざまな領域で、この感染症と正面から向き合っている戦いを繰り広げている研究者と臨床医の知見を結集したもので、現状での本症の病態の解釈と臨床的対応のあり方を知る上で

は有益な資料であろう。また、それぞれの領域における現状の理解は、同時に将来に向けての課題をも示唆するものであり、さらに今後、この感染症にとどまらず、近い将来に襲来するであろう新たな感染症パンデミックに立ち向かわんとする研究者、臨床医にとっては必読の1冊であろう。

● A4変型・頁208 2021年01月
定価：5,280円(本体4,800円+税)
[ISBN978-4-260-04585-8] 医学書院刊

